NPO法人
女性と子どものエンパワメント関西
NEWS LETTER
2014.3.20 Vol. 42

田上 時子のエッセイ

老いる覚悟の大整理

～何を捨て、何を残すか～

母は２０１１年１０月２２日の未明にくも膜下出血で逝った。足掛け３年の介護生活の末だった。享年八十六歳。私の還暦の年に自宅で看取った。

私には仕事をしながらの介護の３年間だったが母にとっては闘病生活だった。急性大動脈瘤破裂症で大手術を受け、その後も度重なる原因不明のヘモグロビン数値の低下に見舞われ、検査や輸血入院の繰り返しだった。

母は人生の最晩年を通して「人間は確実に痛み、老い、そして死ぬ」ということ、そしてどこかで「人生を終結する」準備体制に入らねばならないということを教えてくれた。以来つぎは私自身の老い仕度・死に仕度をすることが課題になったが、母の荷物さえ片付けられないまま丸２年たった。

が、昨年末ついに母の終の棲家として共同名義で購入した一軒家を手放した。

娘を育て母を看取り孫達が遊び愛犬と愛猫と一緒に暮らした家である。売却するには相当な躊躇があったが、いずれ誰かが片付けねばならない。誰かと言っても他の誰かに頼るのでなく私がやらねばならない。片付けも私自身の老い仕度も、頭とからだが動く間にしなくてはならない。

誰にも決して分からない「自分の終わり」をよいものにするには、一体どうしたらいいのか、ＮＰＯ理事長には定年はないが、生涯現役か隠居かどちらを目指すのか、自分らしい老い方とは何なのかをこの２年間必至で考えたがまだ結論は出ていない。ただ、自分が持っているすべてのモノを整理し、老いる覚悟をもつ、と決めた。

引越し先は孫達の住まいの徒歩圏の賃貸住宅にした。終の棲家はここから探そう。

１２０㎡の一軒屋の片づけから５０㎡の共同住宅への移居には頭脳をフル回転させて考えた。単にモノを右から左に処理するのは簡単だが、それでは面白くない。使ってもらえるモノは使ってくれる人・施設へとコーディネイトし、２トントラックでの最後の運び出しは便利屋さんに頼んだ。

悠々自適にはまだ程遠い生活をしているが、これから先は人生の決算期。仕事も私生活も量より質を目指したい。

母が亡くなって丸２年。やっと自分の老いを覚悟をもって前に進む心境になっている。